

浮かび上がる「開拓使」の遺産 ―札幌のまちづくり・ものづくり

■概要

近代国家を目指す明治時代の日本にとって、北海道を開拓し、その資源で産業を興すことはきわめて重要なことでした。そのための国の機関が「開拓使」です。札幌市街地を歩くと近代化の揺り籠ゆかごともいえる役割を果たした施設群に触れることができます。

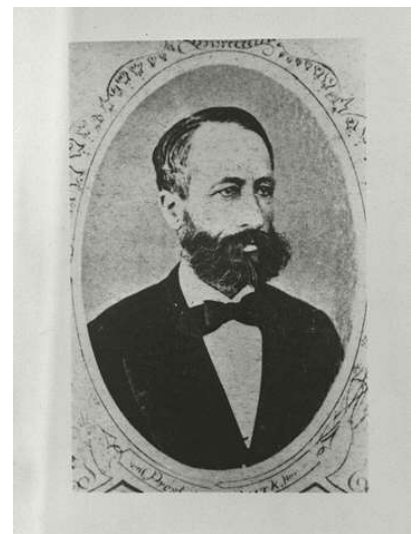
■ストーリー

明治政府は欧米列強からの独立を守るため、近代化と産業振興に取り組みます。北海道は南下するロシアへの防備として重要な場所でしたし、北海道の豊かな資源を開発することは近代国家に生まれ変わろうとする日本の国益に合致するものでした。そこで明治2年（1869年）7月から明治15年（1882年）の間、北海道開発のために設置された国の機関が「開拓使」です。北海道開発は重大な国家プロジェクトだったのです。

北海道は本州以南とは気候も土地条件も異なります。範を求めたのは条件が似ていて大規模な開拓の経験がある米国。開拓次官・黒田清隆はアメリカ合衆国連邦政府の農務長官・ホーレス・ケプロンを開拓使顧問として招きます。ケプロンは多くの外国人技術者（お雇い外国人）を指揮して地下資源調査、測量、道路開削、諸産業の振興に取り組みます。札幌農学校教頭のウィリアム・スミス・クラーク、地質技師のベンジャミン・スミス・ライマン、果樹栽培のルイス・ベーマー、酪農・畜産のエドウィン・ダンなどその数、78人。「開拓使」は北海道の自然の特性を見極めて近代技術を積極的に取り入れました。現・北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）の敷地内には開拓使本庁舎が発掘され、史跡「開拓使札幌本庁本庁舎跡」として残されています。創成川（大友堀）の東側には、明治5年（1872年）から後に工業局・物産局・民事局となる開拓使の担当掛により、製材、木工、馬具いもの、鑄物、製粉、製網せいもう、製糸（紡織所）、製糖、味噌醤油醸造じょうぞうなどの工場群が整備されました。それらでは水車に加え最新鋭の蒸気エンジンを動力にしていました。その背



開拓使札幌本庁本庁舎跡



ウィリアム・スミス・クラーク

景には創成川の舟運の便と、工業用水に使える豊平川の流水の存在がありました。

明治 9 年(1876 年)に北 3 条通沿いに麦酒^{ばくしゅ}醸造所^{じょうぞうじょ}（現・サッポロファクトリーはその跡地につくられたサッポロビールの工場）が開業しました。事業責任者の旧薩摩藩士・村橋久成^{むらはしひさなり}は東京ではなく札幌での建設を主張し実現します。なぜなら醸造技術者の中川清兵衛^{なかがわせいべ}がドイツで学んできたのは冷製発酵の醸造法で、大量の天然氷と冷涼な気候が成否のカギだったからです。

同年、札幌農学校も開校します。卒業後は一定期間、開拓使での奉職が義務づけられ、近代技術を学んだ優秀な卒業生が農業や土木分野で活躍しました。札幌農学校演武場が現・時計台です。

亜麻、ホップ、リンゴ、ブドウ、イチゴなども官園や本庁周辺で試験栽培されました。

移住者を定着させ、北の守りを固めるために採用されたのが、屯田兵^{とんでんへい}制度です。平時は農耕・開墾に従事し、有事には兵士となるよう軍事訓練が義務づけられました。北 3 条通りは屯田兵の父と呼ばれた永山武四郎^{ながやまたけしろう}が自邸から馬で開拓使札幌本庁舎に通った道でもあります。

開拓使のマークは赤い五角形の星（五稜星^{ごりょうせい}）。豊平館^{ほうへいかん}や清華亭^{せいかてい}、時計台など開拓使ゆかりの建物に今も輝いています。清華亭の傍の池では湧水を利用してサケマス^{サケマス}のふ化事業も行われていました。随所で「開拓使」の遺産が浮かびあがる札幌。この街を歩くと、近代国家建設に尽力した先人の思いに触れることができるのです。



麦酒醸造所



旧札幌農学校演舞場（時計台）